大島塾 新聞
ムロノキ新聞社
第１６号

大島塾マスターズ
令和二年春の釣行記

「自粛」が常となった令和二年五月、日常生活の場面でもマスクは欠かせず、不要不急の外出を控え、仕事はテレワーク。そして迎えた六月。一部の地域を除き緊急事態宣言が解除された。「うーん」悩みはしたが、さすがにこの時期五島への釣行は道義上はばかられた。なにせ県境を三つ超えるもんね。東京あたりの方々のご苦労には比べるべくもないが、こんな地方にあってもコロナストレスはじわじわと心を締め付け、もはや何かしないと息が詰まってしまうような・・・。向根、木村に「一県超えくらいなら」と持ちかけるとふたりとも即座にのってきた。島根県浜田港の沖堤防、あそこなら運が良ければ大型魚の夢がある。いま鬱々とした私たちの心に必要なものは**ロマン**じゃ！

仲間を募るとあっという間に七名での浜田釣行が決定した。浜田の港は境港、萩港などと並ぶ山陰の代表的な漁港である。今の時期の旬は何といっても剣先イカ（この辺りでは白イカとよぶ）と産卵をひかえて脂ののったイサキである。浜田漁港の少し沖合には冬の時化から港を守る数本の沖波止が設置されている。

六月六日、今回我々が釣り場としたのはこの波止のなかで最も長い通称「西沖波止（全長九八〇㍍）」。もう二〇年ほども前になるだろうか、秋に何度か訪れたことがあるこの波止ではワカナをよく釣った思いでがある。

浜田港

この度お世話になった渡船は加宝丸、とてもやさしいご夫婦だった。荷物を積み込み約一〇分で西沖波止に到着、まるで「**Gメン75**」のオープニングに出てくる滑走路のような長波止、しかもほとんど人がいないので各自好きなところに陣取りいそいそと準備を始めた。ただあまりに人がいないので、「あんまり釣れていないのか？」と一抹の不安もなくはなかったが、しかしここはそれ日本海。大漁の欲をかかねば、カゴ釣りなら真鯛、イサキ。釣れた小アジを泳がせばワカナ、ヒラマサ。エギングをすれば良型のアオリイカ、なにかしらは釣れよう。強目の北東の横風が気にはなったが釣りにならぬほどの強風ではなかったので、テントも設営してタマヅメからの釣りに備えた。

広　告

一時間もすると空は夕焼けに染まった。フカセでイサキ、グレ狙いの筆者、それ以外はみんな真鯛ねらいのカゴ釣りを開始。オキアミボイルが多量に撒かれておそらく海の中には大きな魚が集まってきているはず。一年前に初の五島を経験したR2こと高橋君。こいつが今回かなりの成長を遂げた。夜のカゴ釣りでもほとんどトラブることなく仕掛けを投げ続けていた。これなら五島に行けば真鯛のチャンスは十分あるなと思った。

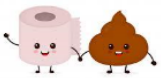
さて釣りを始めるとすぐに一面一〇㌢足らずのサバの幼魚が寄ってきたが、これは五島でもよくあること。暗くなってくればこのエサ取りは大きな獲物に入れかわるが必定。しかし、八時になっても九時になっても上がってくるのはミニサバばかり、ウキ下五㍍から十二㍍まで隈なく探ったがミニサバばかり。カゴ釣りのみんなもミニサバばかり。さらには泳がせ用のエサの小アジ調達をお願いした太田君のサビキ仕掛けに掛かってくるのは五㌢にも満たない稚アジばかり。これでは小さすぎてエサにならない。泳がせ釣りでの大物狙いも諦めざるを得なかった。大漁妄想雲散霧消。十時を過ぎる頃には諦めムードが漂った。となれば、おのずから缶ビールを持ってわらわらと集まってくる。高橋君が燗をつけてくれたワンカップ大関は旨かったねぇ。

久しぶりの仲間との宴会は、長雨の中の晴れ間のような嬉しいひと時であった。翌朝、まだ明けきらぬ四時。筆者が目覚めると宇田さん、向根、木村、谷川はもう釣り始めていた。残りメンバーもそれに続いたが、結局朝八時、渡船のお迎えが来るまで何事も起こらず終いであった。

ゴカイはにがて、アジならお任せ太田くん

この時期、ましてこんな結果の大島塾新聞を発行する価値はあるか？迷う筆者に寄ってきた宇田さん、「あの事はちゃんと新聞に書けよ」とにやりと笑った。長老の一声で発行が決定した。「あの事」とは・・・

夜の宴会で若干深酒気味だった筆者のお腹、明け方くらいからちょっとぐるぐる（また下の話かい？！）。五島なら何のことはない、天然の水洗トイレはどこにでも見つかるのだが、冒頭に書いた通りの滑走路、どこにも隠れる場所がない。はじめは余裕で我慢していたが、徐々にぐるぐるは激しさを増して極めて深刻な状況に陥った。



「あった！」、百メートル先に見つけた個室。内股の情けない格好で尻を押さえてテントめがけて必死で駆けた。あせりながらごみ袋を探して広げ、尻を包んでしゃがみ込み、嗚呼間に合った・・・。「おじさんがテントの中で○○○しよるでぇ～」と向根が大声ではやし立て、みんなの笑い声が聞こえた。筆者自身テントに駆け込む自分の姿が映画「シコふんじゃった」に出てきた竹中直人に重なって、つい笑ってしまった。

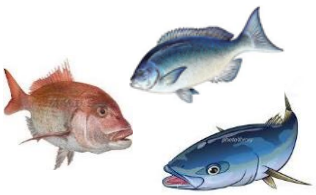
よく見りゃ中に人が・・・

かくして大島塾マスターズ令和二年春の例会は終了した。釣果はなかったが長い自粛生活から解放された一日、心は清々しかった。帰り間際、加宝丸のおかみさんにどこか良い魚屋はないかと尋ねると、港の入り口に仲卸市場があって、そこの一階で魚を売っているという。立ち寄ってみると確かに数件の魚屋が入っていて、どの店もわくわくするような品揃えである。白イカ、イサキをはじめアコウ、マトウダイ、アジ、サバ、生簀には立派なクエも泳いでいた。ここを知ったことは今回の大きな収穫である。はじめは買い物に乗り気でなかった宇田さんが白イカを大人買いし、筆者もイサキ、白イカ、マトウダイを仕入れた。ほかの面々のお土産も家族に喜ばれたようだ。浜田までの行路は思いのほか近く感じられ、天気の良いときを選んでちょいと行ってみると、そのうち良い魚に巡り合えるかもしれない。折を見てまた行ってみようかな。

【編集後記】

今回同行した若手二人、それぞれお相手のお嬢さんが港で手を振っていた。漁に出る夫を見送る若妻、時々テレビで見かける漁港風景のようだった。いいねぇ、若い人は。筆者は君たちの末永い幸せを心から祈っているよ。さて、またしばらくは自戒自粛の日々を続けていくことになるが、みんな頑張って乗り切りましょう、出口はきっと近いから。十一月頃には胸を張って五島に行けますようにっ！（福）

秋には五島で
会いましょう！



筆者の優秀な美人秘書を奪っていった犯人